

岐阜市三輪山真長寺所蔵「十二天像」のうち「閻魔天」 想定模写



真長寺本「閻魔天」 想定模写 平成 19 年

真長寺本「閻魔天」は未修理の状態が長く続いたようで、基底材（絹）の劣化が激しく図像の全体像が著しく損なわれている。しかし顔の描写は大変瀟洒であり、類似作例の西明寺本や正覚寺本と比較しても独特の相貌をしているため、図像本来の様子が損なわれていることが大変惜しまれてならない。そこで平成 19 年度に行われた「閻魔天」の模写では、本来の姿を垣間見るために、絹の浮きや裂けのような基底材の痛みを目立たないように作画する模写を行い、「閻魔天」の絵画性の回復を試みた。

## 1. 研究概要

東海地方には数多くの優れた文化財が残されているが、残念なことに一般的に広く認識される機会が少なく、絵画的な研究があまり進んでいないのが現状である。本研究で取り上げる岐阜県三輪山真長寺蔵「十二天像」にしても、重要文化財の指定を受けている滋賀県西明寺蔵「十二天像」と図像的にかなり近似し、絵画性を比較しても勝るとも劣らない優品であるが、これまで仏画研究の組上に載ったことはない。そこで、本研究では岐阜県真長寺蔵「十二天像」（以降真長寺本と記載）を模写することにより、真長寺本の技法・図像・歴史的位置を実感すると同時に、その研究成果によって地方の優良な文化財の周知、再評価に繋げ、東海地方唯一の公立美術大学として保存修復事業へ向けての研究基盤の構築を目指す。

真長寺本「十二天像」は12幅すべてが同一の方量・表装にもかかわらず、画風は3時代に分かれている。そのうち最も古い制作と思われる4幅（日天・月天・風天・閻魔天）は14世紀頃制作の優品と推定され、欠失した8幅について惜まれる作品である。本研究では平成18年度より真長寺本の画質や技法を絵描きの立場として理解するために、14世紀作の「日天」「風天」「閻魔天」の現状模写を行い、その絵画性を把握することに努めている。

## 2. 閻魔天の現状

現状では画面の至る所で絹が浮き上がり、裂けてしまっている箇所も多くある。さらに画面の所々に施された折れ伏せ（短冊状の補修紙）によって茶色い筋が浮き上がり、またそれとは別の当て紙が顔と左手に持つ人頭幡の部分にある為、そこだけが不自然に目立っている。それらの要素が合わさって、「閻魔天」の図像の全体像が著しく損なわれている。



料絹の剥離

絹が破れて剥がれている状態。画面下部に特に多い



肌裏の浮き

裏打ち層から絹が浮き上がっている



折れ伏せによる損傷

画面の至る所に施された折れ伏せによる絹の亀裂



膏葉張り

顔面部と人頭幡の下に当紙が施されている



全体

左記のような状態・処置によって画面全体が荒れ図像の印象を損なっている

### 3. 作例の検証

類似本である西明寺本、正覚院本を一部図像の参考とし、修理状態を想定して描画する。



真長寺本



西明寺本



正覚院本

### 4. 想定模写



← 白描画

現状上写しから、傷や剥離を  
除いた状態。火炎の様子、  
肥瘦の強い線描など、風天・  
月天・日天の特色に近い。



↑ 絹目

本物の絹目の様子。これよりも少し細かいもの（  
径 42 中 60 枚 2 ツ入り、  
緯 31 中 2 枚ヌキ 100 横）  
を使用した。その他の絹  
の処理は日天・風天と同  
様とし、約 7 時間砧打ち  
を行った。ただドーサの  
効きが弱かったので、明  
礬は 5g に変更した。



↑ 彩色

全体に色を施した  
途中段階。ここま  
ではほぼウラから  
の彩色となっている。



↑ 裏彩色

表の絵の具に近い  
顔料を施す。背景  
にも泥絵の具を数  
回塗った。



← 仕上げ

仕上がった日天・風天と色調を合わせ、愛知芸大資料館収蔵庫にて閻魔天原本を閲覧し、最終調整。仕上げに際し、原本よりも損傷具合をかなり抑えて描写したため、想定画の要素が強い。

※ 阪野智啓 制作（平成 19 年）

赤色	朱、古代朱、辰砂
青色	群青、白群、藍、焼白緑（古色）
緑色	緑青、白緑、草汁（藤黄と藍）、
橙色	丹、辰砂・朱の上澄みの具と黄土の混色
茶色	丹・朱・黄土・白色・墨等の混色、紫土末等の水干絵具
白色	鉛白、白土、胡粉、黄土（古色）

【寸法】 縦 77.7cm 横 36.2cm

【絹目】 経 31 中 70 枚 2 ツ入り 緯 31 中 2 本 80 横

【染色】 ヤシャブシ

【料絹】 砧打ち、ドーサ（水 1000CC・三千本膠 15g・明礬 5g）